

「伝統」と「近代」のブリコラージュとしての彫刻
— ネットリック・イヌイットの彫刻活動に関する覚え書き —

大 村 敬 一 *

Sculpture as the Bricolage of 'traditional' and 'modern'.
Notes on the Carving Activity of Netsilik Inuit.

Omura Keiichi *

Abstract

Contemporary Inuit Art is one of the important cultural elements in modern Inuit culture. Especially since 1949, Inuit Art has played an important role in both the modernization of Inuit life style and the succession of their ethnic identity. Today, Inuit Art is one of the main sources of cash income, which Inuit people need for modernizing their life style, and is the symbolic expression of their ethnic identity. Inuit Art is functioning as a bridge between traditional aspects and modernized aspects of Inuit culture.

In this paper, based on my ethnological survey in a modern Inuit village, I will consider the role of contemporary Inuit carving in modern Inuit culture by analyzing the concept of carving in Inuktitut (language of Inuit) as well as the significance of carving activity in daily life.

1 はじめに

今日、イヌイット・アート (Inuit Art) ⁽¹⁾は、その多彩な造形形式や豊かな象徴的意味世界によって広く世界に知られている。1970年代以後、その歴史的展開、造形形式、象徴的意味内容などが、考古学 (Collins 1962, 1973, Harp 1969/70, Harp and Hughes 1968, Helmer 1980, Martijin 1964, 1967, Maxwell 1984, McGhee 1976, 1977, 1987, 1988, Meldgaard 1960, Talor and Swinton 1967, スチュアート 1985, Swinton 1967), 民族学 (Blodgett 1979, 1988, Carpenter 1973, Carpenter, Varley and Flaherty 1959,

Swinton 1968, 1972, 1978, 1987), 美術史学 (Houston 1951, 1971) の各分野によって研究され、イヌイットの物質文化と精神文化の両側面を理解するための貴重な資料となってきた。

最近では、芸術を通してイヌイットの文化や世界観を再構成しようとするこうした試みに加えて、この芸術が、イヌイットをめぐる社会・経済・政治的環境、特にカナダ国家や資本主義経済の世界システム (world system) への編入という「近代化」の過程で果してきた役割の重要性が注目されるようになってきている。「伝統」⁽²⁾と「近代」、国家と民族、マジョリティー社会とマイノリティー

* スポーツ科学科

* Department of sports sciences

社会、世界システムとエスニシティーなどの間の相互作用の触媒として、この芸術をとらえる視点が提示されている（斎藤 1993, Graburn 1967, 1969a, 1969b, 1976, 1984, 1987, 1993）。

イヌイットの芸術は、価格の変動の激しい毛皮を補う商品として、イヌイットの生活を支える重要な現金収入源であり、特に1950年以後は、アーキティック・コープ（Arctic Coop）などの産業資本の設立と維持にあたって重要な役割を果たす（Mitchell 1993: pp.342-347, Goetz 1993: 357-379）と同時に、イヌイットのエスニック・アイデンティティを具体化した、イヌイットのエスニシティーの表徴としても機能してきた（Graburn 1987: pp.62-63）。

また、歴史的にみても、その造形様式や象徴的意味内容の源流を18世紀以前のプレドーセット（pre-Dorset）文化、ドーセット（Dorset）文化、チューレ（Thule）文化などの先史時代^⑨の文化に辿ることができる一方で、18世紀以来の欧米（文明）社会との交渉による変化、1950年代以後の資本主義経済の世界システムとカナダという国家への編入の過程における芸術市場とマジョリティー社会からの需要への適応などのかたちで、他の文化や世界システムからの要求に应运してきた。

このように、イヌイットの芸術は、新しい社会・経済・政治的環境に置かれているイヌイットがその環境に適応してゆく一つの戦略的手段であったのであり、継承された「伝統」と、資本主義経済の世界市場やカナダ国家への編入という「近代化」の過程でイヌイットが受けた変化の橋渡しをしてきたと言える。

本稿では、こうした歴史を持ち、社会・経済・政治・文化的役割を果たしているイヌイット・アート、特にその彫刻が、現在のイヌイットの実際の日常生活の中にどのようなかたちでとけ込み、「伝統」の継承と「近代化」による変化という二つの側面の統合が日常の彫刻活動の中でどのように体现されているのかを、大局的な歴史や社会・経済・政治的枠組みからみた視点からではなく、筆者が実際に参与観察したイヌイットの日常活動の中での彫刻活動の様子とイヌイットが抱いている「彫刻」という概念を検討することによって検

証してみる。本稿の目的は、イヌイット語（Inuktitut）における「彫刻」という概念の意味を考察しながら、イヌイットの日常活動の中での彫刻の意義を考察することによって、いくつかの問題点を提示しつつ、「伝統」と「近代」のはざまで果たしているその機能を考察することである。

2 カナダ・イヌイットの彫刻と調査地の概略

2-1 カナダ・イヌイットの彫刻

カナダにおけるイヌイットの彫刻の歴史は、大きく三つの時期に分けることができる（Blodgett 1988: p.21）。一つは18世紀以前の「先史時代（pre-historic period）」であり、さらに18世紀以後から1949年までの「民族誌時代（historic period）」、そして最後に1949年から今日にいたるまでの「現代（contemporary）」である。

先史時代は、紀元前2000年から紀元1700年前後までの期間にわたるプレドーセット文化、ドーセット文化、チューレ文化、さらにその後の現在のイヌイット文化の初期の時代に属する時期（註3参照）であり、欧米（文明）社会との持続的な交渉がはじまる以前にあたる。この時代に関しては文献資料は存在しないが、考古学者によって発掘された遺物を通じたその文化の研究が行われており、すでにこの時代の彫刻には、続く歴史時代と現代の彫刻の造形形式や象徴的意味内容の起源がみられるとされている（Blodgett 1988pp.21-22, Martijn 1964, 1967, Taylor and Swinton 1967）。什器や狩猟用の道具の装飾として、あるいは魔除けなどの宗教的・儀礼的道具、あるいは子供用の玩具や埋葬品として、流木やセイウチの牙、イッカクジラの歯、カリブーの角、クジラの骨などを素材とした彫刻が作られている（McGhee 1988: pp.13-20, Martijn 1964, 1967, スチュアート 1985: pp.459-464, Taylor and Swinton 1967）。主題も、幾何的な文様からシャマニズムと関係の深いクマ、狩猟活動の様子などの具象的なモチーフまで多彩である（McGhee 1988: pp.13-20, Martijn 1964, 1967, Taylor and Swinton 1967, スチュアート 1985: pp.459-464）。

16世紀には捕鯨関係者、さらに17世紀にはハドソンズ・ベイ会社（Hudson's Bay Company）を

中心とする毛皮交易の商人、18世紀に入ると大西洋から太平洋へ抜ける北西航路 (Northwest Passage) の探索を行った探検家、また19世紀から20世紀にかけてはボアズ (F. Boas)、フラハティー (R. Flaherty)、ラスムッセン (K. Rasmussen) をはじめとする人類学者、カナダ連邦警察 (R. C. M. P.) をはじめとする政府関係者などが、それぞれの目的でカナダ中部極北圏に入るようになり、欧米 (文明) 社会との交渉が持続的になる18世紀の初頭から民族誌時代がはじまるとされている (Blodgett 1988: pp. 21-22)。この時代には、それ以前の先史時代と同じような目的の彫刻が作られ続ける一方で、極北圏に入ってくる欧米人のためのお土産、あるいはハドソンズ・ベイ会社の交易ポストでライフルや銃弾、鉄製品、小麦粉などと交換するための交易品の一つとしての彫刻が作られるようになる (Blodgett 1988: p. 22-28)。しかし、この時代に新しく作られるようになるお土産としての彫刻は、「現代」の彫刻のように持続的に作られるものでも、世界的な芸術市場の動向を意識したものでもない。しかし、すでにライフルなどの欧米 (文明) 社会の産物が生活の必需品となっていたこの時代のイヌイットにとって、欧米 (文明) 社会との交易は不可欠になっており、価格の変動が激しい、それまでの主要な交易品である毛皮を補うかたちで、交易品としての彫刻が注目されるようになってゆく (Goetz 1993: pp. 357-374)。

1940年代より、それまでの主要な交易品である毛皮の世界市場での価値が一時的に暴落する事件や、カリブーの不猟による飢饉などの事件⁽⁴⁾によって、イヌイットの窮状に対する非難が欧米社会からあがるに及んで、カナダ連邦政府がイヌイットへの経済的援助を考慮するようになると、一つの重要な現金収入源として彫刻が注目されるようになる。主にカナダ工芸品ギルド (Canadian Handicrafts Guild) とハドソンズ・ベイ会社がこの試みに積極的に協力したが、1949年にヒューストン (James Houston) がカナダ工芸品ギルドの資金と委任を受けてハドソン湾周辺からバッフィン島に分布するイヌイットを訪問し、彫刻の購入と奨励を行ってから、現代の時代がはじまったと

される (Blodgett 1988: pp. 21-22)。ヒューストンの奨励が成功したこと、またヒューストンが持ち帰った彫刻が飛ぶように売れたことなどがあり、1950年代の半ばまでには、イヌイットの彫刻を含めた芸術は、カナダ南部での持続的な市場を獲得するようになる。以後現在にいたるまで、様々な問題を抱えつつも⁽⁵⁾、彫刻はカナダのかなりの地域のイヌイットによって持続的に作られ、主にアークティック・コープの流通経路を通してカナダ、アメリカの市場に売られるようになってゆく。また、「北極でできることなら何であっても、他のところではそれをより低価格ですることができる」 (Mitchell 193: p. 343) とされるような状況の中で、アークティック・コープの他の産業を興す試みは大方失敗したが、その中であってこの芸術は順調に収益を伸ばし、これまでのアークティック・コープのほとんど唯一の収入源であった (Mitchell 1993: p. 343)。

このような状況の中で変遷し、発展を続けてきたイヌイットの彫刻は、イヌイットの主要な現金収入源としての重要性を持つに伴って、世界的な芸術市場を意識しはじめ、「イヌイットらしさ」といったステレオ・タイプを生むと同時に、素材、造形形式、主題などが多様化しはじめ、顕著な地域的様式がみられるようになった (Goetz 1993: pp. 366-367)。このステレオタイプ化と地域化はほぼ同時におこったが、これは主にハドソンズ・ベイ会社の駐在員や宣教師などの彫刻の奨励者の影響によるところが大きいとされている (Goetz 1993: pp. 366-367)。主に経済的理由によって奨励され、カナダ南部での需要を優先的に考慮する必要があったため、どのようなテーマをどのような素材にどのような形式で彫りあげるのかは「イヌイットらしさ」を強調するものに傾く傾向が強く、実際に当時の奨励者の努力は、売れる彫刻をいかに奨励するのに注がれた (Goetz 1993: pp. 366-367)。また、それぞれの奨励者はそれぞれの地域で、自分なりの方法で奨励活動を行い、20世紀前半の民族誌の記録を手本として示したり (Graburn 1987: pp. 52-53)、仕上げの研磨が施されていない彫刻を購入しなかったり (Goetz 1993: p. 367) といった様々な工夫がなされた。現在認め

られる様々な地域的特色の多くは、こうしたそれぞれの地域の奨励者の趣向を反映していることが多いと言われている (Routledge and Hessel 1993: pp.443-477)。

このように、イヌイットの現代の彫刻には、経済的理由とカナダを含む世界経済と芸術の市場の趣向を反映する「つくられた」側面が色濃く認められるが、先史時代や歴史時代から継承されている側面も大きい。こうした継承されている側面は主に造形形式に顕著であり、イヌイットの彫刻の成功につれて模造品が数多く作られたが、顔面部の描写や全体の形態の特徴などの点で、イヌイット自身は欺かれることなく模造品を看破すると言われている (Graburn 1987: p.50)。こうしたイヌイットの彫刻に通底する特徴は全体的な形態の重厚性であるとされており、こうした形態上の特徴や主題の多くは、欧米 (文明) 社会との接触期初期からの影響を強く受けている (Blodgett 1988: p.28, Graburn 1987: pp.60-62)。

このように歴史的展開を概観すると、イヌイットの現代の彫刻は、まさにカーペンターが指摘するように (Carpenter 1973)、カナダのマジョリティー社会との交渉の結果として、イヌイットが「伝統」に新しい要素を組み合わせ作り出した新しい芸術であり、「伝統」と「近代」とを橋渡す文化要素として重要な役割を果たしてきたと言える。



地図 1

2-2 ペリーベイ村のネツリック・イヌイットの彫刻：調査地とデータ収集の概況

1992年5月31日～9月24日の約4か月間、筆者はカナダ国北西準州ペリーベイ村 (Canada, Northwest Territories, Pelly Bay) で行われた民族学及び考古学調査に参加し、ペリーベイ村の何人かの彫刻家の彫刻活動を観察する機会を得た。

この村は、北緯68度32分、西経89度49分に位置し、カナダ中部極北圏のツンドラ地帯にある (地図1)。この村に住むイヌイットは、北米大陸カナダ中部極北地域に分布しているネツリック・イヌイット (Netsilik Inuit) の一地域集団アグビリグユアグミウト (Arviliguarmiut) と呼ばれる人々であり、エスキモー・アリュート語族 (Eskimo-Aleut family) に属するイヌイット語 (Inuktitut) のネツリック方言の下位方言アイビリグユアク (Arvilgjuak) 方言を話している (Dorais 1990a: p.194, 1990b: p.67-68, Woodbury 1984: p.56)。

1960年代以後、ペリーベイ村のあるペリー湾周辺で季節移動生活をしていたアグビリグユアグミウトのほとんどがこのペリーベイ村に定住しており⁽⁶⁾、現在では、季節移動生活を続けているイヌイットはいない。

小さな村落ではあるが、毎日一便の定期便が停まる空港、生活共同組合 (COOP) の店舗、役所、コミュニティセンター、学校、衛星通信のパラボラアンテナ、郵便局、発電所、燃料集積所、看護所、カトリック教会などの一通りの公共施設が整っている。この村には、カナダ連邦警察や生活共同組合のマネージャー、政府の出先機関の役人、看護所の看護婦、学校の教師などのごく少数の英系カナダ人とともに、1990年当時で358人のイヌイットが暮らしている (岸上 1990: p.5)。また、村から150kmほど離れた山上には、カナダ空軍 (R.C.A.F.) の早期警戒レーダー網 (N.E.W.S.) の基地と軍用飛行場があり、1992年当時は英系カナダ人の空軍関係者が駐屯していたが、村との接触は禁止されていた。

この村は、セイウチの牙やクジラの骨、付近で採れる石を素材に彫られるミニアチュール彫刻 (miniature sculpture) で有名であり、非常に小型で精巧に作られたイヌゾリ (写真1) やハンタ

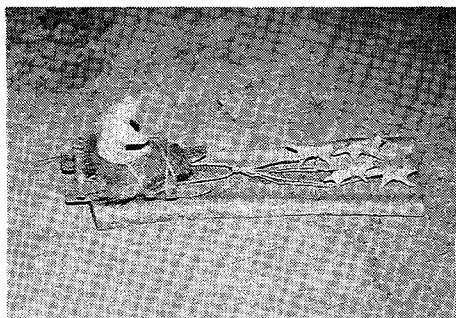


写真1 イヌゾリのミニチュール彫刻

一、ホッキョクグマ、アザラシ、鳥、クジラ、超自然的存在、ウル (ulu) と呼ばれる女性用ナイフやカキバト (kakivat) と呼ばれるヤスなどの「伝統的」な道具などからなる群像、指輪や腕輪、ネクタイピンなどが作られている。

ミニチュールの伝統の源流は古くは先史時代にまで求めることができ、また欧米社会との接触期初期においても、シャマンの墓から出土した様々な日常道具の模造品 (スチュアート、山浦 1989) などにその原形が見られる。しかし、こうしたミニチュール彫刻がこのペリーベイ村とリパルスベイ (Repulse bay) 村を代表する彫刻となるのは、1950年のヒューストンの3週間にわたるリパルス・ベイ滞在と彫刻の奨励以後である (Routledge and Hessel 1993: pp.463-466)。

これ以前にも、この地域に滞在したカトリックの宣教師フランツ・バン・デ・ベルド (Franz Van de Velde) などの彫刻の奨励 (Routledge and Hessel 1993: pp.463-466) によって、交易品としてミニチュールは作られていた。そうした環境の中でミニチュール彫刻を作っていたマーク・トンギリク (Mark Tungilik) がリパルス・ベイに移り住んだ後、そこでヒューストンと出会い、それ以後、ミニチュールがこの地域一帯の代表的芸術としてカナダの芸術市場で認められる彫刻様式となっている。何人かのインフォーマントの話によれば、この時から1980年代初頭にかけて、カナダ政府の福祉金や鉱山への出稼ぎ以外のほぼ唯一の現金収入として、どの世帯でもミニチュール彫刻を作っていた。しかし、彫刻の流通をほぼ一手に引き受けている生活共同組合の現地マネ

ージャーによれば、現在では過剰生産とワシントン条約によるアイボリーの輸出禁止のあおりを受けてあまり作られていない。そのマネージャーによれば、現在ペリーベイ村で実際に活動している彫刻家は7人である。

3 イヌイット語における「彫刻」の概念

ペリーベイ村で話されているイヌイット語のアグビリグユアック方言では、彫刻にあたる語は hananguaq である。この語は hana- と -nguaq という2つの形態素からなっており、それぞれの形態素の意味は、hana- が「働く、作る」、-nguaq が「何かを模倣した小さなもの」なので、字義通りの意味は「何かを模倣して作られたもの」ということになる。つまり、ペリーベイ村のイヌイット語では、「彫刻」は文字通りミニチュールを指している。また、「私は彫刻をする」は hananguaqtinga という語で表現されるが、この語の字義通りの意味は「私は何かを模倣した小さなものを作る」である。

グラバーンによれば、この hananguaq は, Inuit sanasimajangit という「イヌイットの芸術 (Inuit Art)」を指す概念に含まれる下位概念である (Graburn 1987: pp.47-48)。この Inuit sanasimajangit は、「イヌイット」を指す Inuit という語と、「働く、作る」という意味の sana- (ペリーベイ村のアイビリグユアック方言では子音 s は h になる) と「ある状態にある」という意味の -sima-, 「された」という受身を示す -jau-, 名詞形を示す -git という4つの形態素からなる語とからなっており、文字通りの意味は「イヌイットによって作られたもの」となる。この語はかつては文字通りイヌイットによって作られていたすべての道具や産物をさしていたが、イヌイットが自分で道具や日常品を作らなくなり、事実上イヌイットが作るものが「芸術」と呼ばれる彫刻や版画に限られるようになってきたこと、また、イヌイット語ではそれぞれの道具を指す明確な語が存在するためにこうした総称的な語があまり必要ではなかったことから、この Inuit sanasimajangit が「イヌイットの芸術」のみを指すようになったという (Graburn 1987: p.48)。しかし、ペリーベイ村の

アグビリグエアク方言では、この語はあまり用いられておらず、また英語を話す若い世代も、art という語ではなく、carving という語の方を一般的に用いることが多い。筆者が知る限りでは、art に相当するアグビリクエアク方言の語はない。

つまり、マケットがプリミティブ・アート (primitive art) 全般に関して、「我々の展示ケースの外側にはプリミティブ・アートなどというものはない。特に博物館やギャラリーの対象といったものが創造されていないような無文字社会では」(Maquet 1971: p.16) と述べているように、ペリーベイ村のイヌイットの間には、「芸術」という概念は存在しない。その代わりに「彫刻」を指す hananguaq があるが、この語は正確には「何かを模倣して作られたもの」という意味であり、彫刻家の創造性や個性といったものを含まない概念である。こうしたことから考えて、イヌイットにとっての「彫刻」は「模倣」に重点を置く概念であると言える。

イヌイットにのみ限られることではないが、この「彫刻」概念の中心にある「模倣」はイヌイットの文化の中心を占める重要な概念であることが指摘されている (Rundstorm 1990: pp.163-166)。イヌイットの子供に対する教育においては、「教える」という概念はなく、「教える」と意識することのできる語 ilinniaqtitug の字義通りの意味は「学ぶように仕向ける」、「教師」を意味する語 ilinniaqtitiji の字義通りの意味は「学ぶように仕向ける人」である。また実際、特に何かを教えるという行為はなされない。多くの場合、親族の年長者の行っている行動を「見て学ぶ」ことが要求される。これは教育における「模倣」の重要性を意味している。また、ライフルが導入される以前には、アザラシ猟やカリブー猟では、アザラシやカリブーの姿や運動を模倣して接近し、弓矢や回転離頭銃で仕留める猟法が行われており (Rundstorm 1990: pp.163-164)、「模倣」の一種である擬態が狩猟活動の重要な部分を占めていた。

このように、イヌイットの「彫刻」という概念では「模倣」が重要な位置を占めており、また「模倣」はイヌイットの文化の中で中心的な位置を占めていたと推測することができる。特にペリーベ

イ村の彫刻様式とされるミニアチュール彫刻は、この「模倣」としての「彫刻」というイヌイット概念を強く継承したものであると言えるだろう。

4 彫刻の動機

彫刻の最大の動機は経済的なものである。少なくとも、筆者が話しをする機会があった3人の彫刻家の最大の動機は現金を獲得することであり、また、他の村の彫刻に関する調査においても、彫刻が行われる最大の動機は経済的なものであって、それ以外の動機、例えば美的衝動や宗教的・儀礼的目的といったものはほとんどみられないことが明かにされている (Mitchell 1993: p.345) また、製作されてアークティック・コープに納入される彫刻の量は、現金がすぐに必要とされるような、狩猟期の直前にあたる春とクリスマス直前⁽⁷⁾にかたよっていることも指摘されている (Mitchell 1993: p.345)。これは、先に彫刻の歴史のところでみたように、そもそものイヌイットの現代の彫刻の隆盛が、イヌイットの経済的危急を救うために政府や民間団体が行った奨励に起源をもっていることがその最も大きな原因であろう。

興味深いのは、こうした彫刻によって得た現金収入の使い道である。筆者の観察した限りでは、この現金収入の使い道には大きく2つのパターンがある。

一つは、こうして得られた現金収入が、ライフルやその弾薬、スノーモービルとその部品と燃料、舟外機付きのアルミニウム製の小舟とその部品と燃料、ナイロン製の漁網、無線機とその部品といった狩猟・漁労などの生業活動に必要な機材の購入や維持に用いられる場合である。

もう一つは、ポテトチップスやチョコレートなどの菓子や清涼飲料水、レトルト食品などの加工食、玩具、レディメイドの衣服、タバコなどに使われる場合である。これらはすべて生活共同組合で購入することのできる工業製品であると同時に、生活や生業活動に必ずしも必要なものではなく、現金収入が定常的に手に入る定職の数किわめて限られているペリーベイ村では贅沢品の部類に入る。しかし、スチュアートが指摘しているように (スチュアート 1992a: pp.78-81, 1992b: pp.232

-236), こうした加工食品や衣服, 玩具といったものは現在, イヌイットの生活の中で大きな比重を占めるようになってきており, 特に食料の場合には, 従来の生業活動によって獲得される食料に取って代わりつつある。

以上の両方の場合に共通しているのは, 現金でしか手に入らない工業製品を入手するために現金が使われていることだが, 前者の場合には生業活動に必要な製品であるのに, 後者の場合には生業活動とは関係のない, あるいは狩猟・漁労・採集といった従来の生業活動によって賄われる食生活に代わるような製品の入手に使われている点で異なっている。また, 前者の場合には, 狩猟・漁労・採集などの生業活動の「近代化」に促された結果として考えることができるが, 後者の場合は, 逆に食生活の「近代化」を促す結果となっていると考えることもできるだろう。

1920年代にライフルが導入されて以来, イヌイットの生業活動はライフル, スノーモービル, 舟外機付きボートなどにますます依存するような歴史をたどってきた(スチュアート 1992a: p.77)が, その実現には現金が必要であり, 彫刻の歴史について概観したところでみたように, その現金の獲得のために彫刻は発達してきた。この意味で, イヌイットの彫刻は「近代化」された生業活動を維持するために重要な役割を果たしてきたと言えるが, 一方で, 同じ彫刻によって獲得された現金収入が, 食生活の変化を促す一つの原因となってきたのである。これは, イヌイットの彫刻の発達で, 「近代化」されつつも従来の形態をある程度保っている生業活動を維持する大きな力となってきたと同時に, 食生活という生業活動の基礎を変化させる媒体としても働いたという皮肉な結果を招いたことを示している。

現在のペリーベイ村では, 従来の生業活動は本来の生活の維持という目的からイヌイットとしてのエスニック・アイデンティティーを象徴的に保証する活動へと変質しつつある(スチュアート 1995)。生業活動に必要なガソリン, ライフルの弾丸, ライフルやスノーモービル, 舟外機付きボートなどの購入, 維持にかかる費用と比べ, 狩猟・漁労活動で得られる成果の効率は極端に悪いこと

が明らかになっており(スチュアート 1995), また, こうした生業活動で得られた食料を若いイヌイットはあまり食べなくなっている(スチュアート 1992a: pp.78-81, 1992b: pp.232-236)。しかし一方で, 生業活動はイヌイットにとって未だに重要な文化要素であり(スチュアート 1995), 生業活動を行わないイヌイットはイヌイットではないとまで言われる。

こうした「伝統」と「近代」の混合による生業活動に対する意識の変化に対する彫刻の影響を, こうした彫刻の動機にうかがうことができるのではないかと思われる。

5 生活の中の彫刻活動

5-1 素材と道具

アークティック・コープが, ワシントン条約による規制で輸出のできないセイウチの牙の代わりとして, ペリーベイ村の近辺で採集することのできる石材を素材として使うことを奨励しているにもかかわらず, 現在ペリーベイ村でもっともよく使われる彫刻の素材は, セイウチの牙である。しかし, このセイウチはペリーベイ村周辺にはまったく棲息していないので, 普通は生活共同組合で購入されたり(一本100\$~150\$), 他の村でセイウチ猟をしてきた親族から手に入れている。このセイウチの牙がよく用いられるのは, 村を時折訪れる観光客などの間で, セイウチの牙製の彫刻がお土産として人気があり, 高値で売れるからである。実際, 筆者が滞在している間にある彫刻家を訪れて彫刻を注文した英系カナダ人はすべて, セイウチの牙製の彫刻と装飾品を希望していた。この点にも, イヌイットの彫刻が, カナダ国内でのイヌイットのステレオタイプに強く影響されていることがわかる。

このセイウチの牙の他に, 彫刻の台座としてよく用いられるクジラの骨やカリブーの角, ペリーベイ村周辺で採れる彫りやすいが堅い白色の石が使われる。これらは, 狩猟や, 狩猟の合間に先史時代の遺構を掘り返すことによって収集される。1992年の調査の際には, カリブー猟とアザラシ猟の間の休憩時間の約2時間にわたって, 休憩地付近の遺跡からかなりの数のクジラの骨をキャンプ

参加者全員が採集する現場に立ち会った。

現在では、彫刻の道具は、万力や糸ノコ、電動ドリル、歯医者が用いる研磨器などであり、「伝統時代」の道具はまったく用いられていない。その他、部品接合用の瞬間接着剤、彩色や切りだし位置を素材にマークするための色鉛筆、仕上げの研磨用の紙ヤスリと中国製のワックスなどが用いられているが、これらの補助的な道具も含めて、彫刻の道具はそのほとんどが生活共同組合で購入された工業製品である。

5-2 彫刻の技術

彫刻の工程を、ここでは、筆者が狩猟キャンプで観察することのできたホッキョクグマの単像（写真2）を例にとって簡単に記述してみる。



写真2

- 1（素材の切り出し）素材のセイウチの牙一本を万力で固定し、糸ノコで10cm程度の四角い塊を切り出す（写真3）。



写真3

- 2（輪郭の切り出し）切り出された四角い塊を万力で固定し、彫り出されるホッキョクグマの輪郭にあわせて大まかな輪郭が、糸ノコで切り出される。
- 3（研磨器による成形）以上で大まかな輪郭が切り出された塊から、研磨器でホッキョクグマの形を彫り出す。この研磨のみによって、ホッキョクグマの形態が成形される（写真4）。



写真4

- 4（仕上げの磨き）彫り出された形態に滑らかな光沢を与えるために、紙ヤスリやワックスで磨きあげられる。
- 5（細部の仕上げ）ホッキョクグマの目、手足の爪などの細部を研磨器と電動ドリルで入れて、そこに鉛筆の黒鉛をすり込む。
- 6（台座への固定）乾燥させておいたカリブーの腰骨を万力と糸ノコで薄く切り出して台座を作り、その上に完成したホッキョクグマの彫像を固定すると完成。この固定は、輪郭を切り出す時に出た小さな棒状の屑をホッキョクグマの足とクジラの骨の台座に開けた小さな穴に入れて瞬間接着剤でとめることで行われる。

インフォーマントによれば、こうした彫刻の方法は、特に誰かから教わったものではなく、誰かの仕事や作品を見て真似をし、自分なりの工夫をして開発したもので、彫刻家ごとにそれぞれ自分のやりやすい方法があるという。ここでも、先に考察した「模倣」が重要な要素を占めており、カナダの市場に作品が数多く出回っているある著名な彫刻家の場合、別の著名な彫刻家の作品の真似

であることが明らかであるのに、誰かが文句を言ったり、それによって評判が落ちるということは、筆者が観察した限りではなかった。

こうした意味で、確かに実際の工程で使われている技術は、工業製品の道具の導入などによるもので、「伝統時代」の技術を用いていないが、その導入の仕方にはイヌイットの文化に根差している「模倣」が重要な意味を持っているように思われる。

5-3 狩猟キャンプでの彫刻活動

ここでは、以上のような素材、道具、技術で行われる彫刻活動が、実際の日常生活の中にどのように組み込まれているのかを、一つの例として、筆者が参加した狩猟キャンプの中でのある女性の彫刻家（写真5）の二日間の行動を追ってみることで考察してみたい。

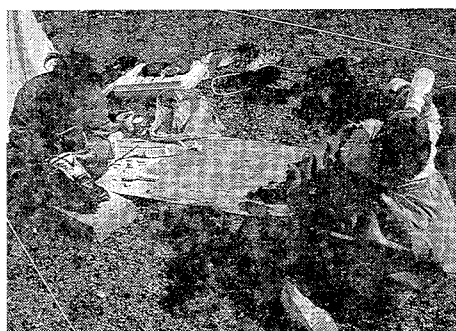


写真5 狩猟キャンプでの彫刻活動

6月22日

- 8:00am 起床後、朝食。
- 9:00am 夫が村に買い物に向かうのをテント前で送る。
- 9:15am テント内の寝具や着物を外に出して干す。同時に先日村からオイに運んでこさせた彫刻道具一式（万力と段ボールに入れられた道具）をテントの外に出す。
- 9:30am テントの中でタバコをのむ。
- 9:35am 素材と糸ノコを外に出す。
- 9:40am 村と無線連絡をとりながら、捜し物をする。
- 10:25am 作業開始。素材の切り出し。
- 11:20am オイの妻を呼び、彫刻をしながら指示

を与えて、昼食用にカリブーの肉を切らせる。

12:00am 昼食。

12:30am 作業再開（素材の切り出し、輪郭の切り出し）。

1:00pm 夫が村から帰り、運んできた発電機を据え付ける。研磨器をその発電機につないで研磨による2つのホッキョクグマ像の成形を始める。

2:00pm 夫に誘われて氷上漁に向かう。

4:00pm 氷上漁より帰還。

4:15pm 作業再開（研磨によるホッキョクグマ像の成形）。

5:00pm 夕食。

7:00pm 作業再開（研磨によるホッキョクグマ像の成形）。

7:45pm 作業終了（ホッキョクグマ2つとスプーン1つは外形が整う）。片付けの後、テントでお茶。

9:00pm 就寝。

6月23日

8:00am 起床後、朝食。

8:30am 洗濯と洗髪、身体拭き（ストーブでナベの湯を沸かし、その中で洗う）。この間に、暇をみてホッキョクグマ像とスプーンを紙ヤスリで磨く。

10:00am バノック（無発酵パン）を作る。

12:30am 昼食。

1:00pm 夫とともに氷上漁に出発。

4:00pm 氷上漁より帰る。獲物の魚をさばき、煮魚の準備。

4:30pm テントの中でホッキョクグマとスプーンを紙ヤスリで磨く。

6:30pm 夕食。

7:30pm キャンプに訪れた息子夫婦と雑談をし、孫の面倒をみながら、紙ヤスリによる研磨を続ける。

10:00pm 就寝。

以上の記録からすぐに分かることは、彫刻活動がまったく雑然と日常の生業活動や家事と溶け込

んでおり、集中的に行われる活動ではないということである。また、実際に彫刻を行っている間も、無線を聞いたり、孫や子供の面倒をみたり、食事の準備をしたり、雑談をしたりと、完全に彫刻にのみ集中している時間はほとんどない。ともかく暇があれば、片手間であっても彫刻をするという印象がもっとも適当である。

しかし、ここで報告した女性の彫刻家は、カナダの市場に作品が数多く出回っているほどの名前の売れた彫刻家であり、腕は確かである。ただし、あくまで器用であるという種類の腕であり、個性や独創性といったものは認められない。また、彫刻活動には現金収入を見込むという以上の特別な意味づけはなく、狩猟活動や家事と同等に扱われている。彫刻をするために漁に出ないということではなく、むしろ、この狩猟キャンプでは、キャンプに出る前に数多くの注文を受けていたにもかかわらず、なるべく漁をするために極力注文を断っていた。

こうした彫刻活動の日常生活の中での位置づけは、男性がしばしば行うスノーモービルや四輪駆動バギー、舟外機付きボートの修理、そして女性が行うパーカーやカミック (kamik) と呼ばれる靴の製作といった活動と何ら変わるところがないように思われる。そうした活動が衣服や機材の生産と維持に直結するのに対して、彫刻活動では、生産と維持への結び付き方が現金という媒体を通じた間接的なものであるという点が異なるだけであるとさえ言えるかもしれない。

6 考察と今後の展望：「伝統」と「近代」のブリコラージュとしての彫刻

本稿では、ペリーベイ村に住むネツリック・イヌイットの現代の彫刻について、イヌイット語の「彫刻」の概念、彫刻をする動機、彫刻の素材、道具、技術、日常活動の中で彫刻活動が占める位置を、筆者が収集したデータから考察してきた。ここでは、以上の考察をまとめて、考察といくつかの問題点を提示し、今後の研究の展望を示してみたい。

まず、次の4つの結論を導き出すことができる。

(1) イヌイット語の「彫刻」の概念の検討によっ

て、現代のイヌイットの彫刻が「模倣」という概念を内包する要素であり、この「模倣」という概念が、イヌイットの重要な文化要素として、先史時代から、あるいは少なくとも欧米（文明）社会との接触期初期から継承されたものであることがわかる。

(2) 彫刻は主に経済的な動機によって作られているが、こうした動機が2つの相反する結果をもたらしている。彫刻によって得られた現金が、「近代化」によって変化してはいるものの、それでも従来の姿を保っている生業活動を維持するために役だってきたが、一方でそうした現金収入が食生活を大きく変化させる要因となっている。生業活動によって得られる食料が加工食品にとって代わられつつあり、その結果、生業活動の役割が本来の生活維持からエスニシティの象徴へと変化してしまっている。このような意味で、彫刻は「伝統」を維持する役割を果たしてきた一方で、「近代化」を推し進める要因ともなっている。

(3) 彫刻に用いられる素材を検討すると、主な購買対象である英系カナダ人が要求する「イヌイットらしさ」という概念に強く影響されており、ペリーベイ村周辺では現在狩ることのできないセイウチの牙がもっぱら好んで用いられている。この点に、イヌイットの彫刻がカナダあるいは世界の芸術市場の趣向から受けているかなりの強さの影響をみることができる。

(4) 彫刻に用いられる素材、道具、技術、実際の彫刻活動が日常生活の中で占める位置などを検討してみると、道具や技術の「近代化」が多くの部分でみられると同時に、その採用の仕方が「模倣」などの「伝統的」な概念で支えられていることがわかる。こうした意味で、イヌイットの彫刻活動を、「伝統的」な枠組に「近代化」された要素が組み込まれて統合されたものとみなすことができるように思われる。

つまり、ペリーベイ村に住む現代のネツリック・イヌイットの彫刻活動には、少なくとも「伝統的」な要素と「近代化」された要素とが雑然と混じり合ったブリコラージュとしての性格を認めることができ、また、そうした性格をもつ彫刻は、

そこから得られる現金収入によって、イヌイットの「伝統」の継承を保証すると同時に「近代化」の推進を促す両面性を持っていると結論づけることができるように思われる。

しかし、以上の考察はあくまで暫定的なものであると同時に、筆者が持っている非常に限られた情報を概観しただけのものにすぎない。例えば、本稿では、イヌイットの現在の彫刻で用いられているモチーフについては考察しなかった。また、「イヌイットらしさ」といった概念がカナダや世界の美術市場でいかに形成され、それがイヌイットに逆投影されて内面化されてきた過程や、「伝統」と「近代」が実際にどのようなかたちで入り混じっているのか、あるいは「伝統」というかたちで示されるイヌイットのアイデンティティーが「近代」という概念と相対立しながらいかに生成されてきたのか、また、その過程で彫刻がどのような役割を果たしてきたのか、などの問題が今後の課題として残されている。

しかし、少なくとも本稿では、イヌイットの現代の彫刻が、イヌイットの「伝統」と「近代」の間の間隙を橋渡す重要な要素として機能してきたという仮説を提示し、現在進行しつつある「近代化」の中で重要な位置を占めていることは示唆することができたように思う。今後、以上の課題を吟味しながら、「近代化」という問題の中で果たしているイヌイットの彫刻の意義を問うてゆきたい。

[付記]

本稿で用いられているデータは、1992年5月31日～9月24日に行われた「ペリーベイ調査計画(Pelly Bay Project)」の一環として行われた調査の成果に基づくものである。なお、この調査計画は、平成4～6年度文部省科学研究費補助金の助成を受けて行われた(国際学術研究「伝統イヌイット(エスキモー)文化の生業活動に関する民族考古学的研究」, スチュアート ヘンリ代表, 課題番号04041099)。また、本稿で用いている写真は以上の調査の際に筆者が撮影したものである。

[謝辞]

本稿を草するにあたって、スチュアート ヘン

リ先生と蔵持不三也先生から貴重なコメントを賜った。また、調査地のペリーベイ村では、インフォーマントあるいは通訳、ガイドとして、Martha Kutjuutiqu, Levi Illituq, Emily Illuituq, Adel Siggukの諸氏をはじめとする人々のお世話になった。ここに記して心からの謝意を示すことにしたい。

註

- (1) ここでのイヌイット・アートは、カナダに住むイヌイットのアートの意味で、ロシア、アラスカ、グリーンランドに住むイヌイットあるいはエスキモーのアートは含まない。なお、イヌイットという民族呼称はカナダとグリーンランド、北アラスカに住むイヌイットにのみあてはまる呼称(スチュアート 1993:p86)で、「人間」を意味する inuk の複数形である。
- (2) ここでの「伝統」は、1960年代の定住化以前の時期のラベルとして便宜的に用いたものであって、この語には、定住化以前のイヌイットの文化が不変で同質であったとか、他民族、他文化との接触がなかったという意味は含まれていない。また、この「伝統」に対する語として用いた「近代」という語は、1960年代の定住化に伴って生じた生業活動の機械化や食生活などの著しい変化を経た時期のラベルとして用いている。
- (3) カナダにおける先史エスキモー文化の文化伝統は、B.C.2000年頃にはじまったとされるブレ=ドーセット文化にまで遡り、B.C.500年頃～A.D.1000年頃までのドーセット文化、A.D.1000年頃～A.D.1700年頃までのチューレ文化を経て現在のイヌイットの文化にいたるとされる(スチュアート 1985:pp.449-450)。しかし、この歴史的枠組は、分布の状況や生業のパターンなどを基本とした枠組であって、生物集団としての同一性を前提としていない。生物集団としての同一性を基準とした場合には、カナダにおける現在のイヌイットの歴史はチューレ文化にまでしか遡れず、形質人類学的資料が欠如しているため、それ

以前の文化との繋がりとは断定できないとされる (スチュアート 1985:p.449)。

- (4) 1950年代には、キーウェンテン (Keewatin) 地方で、カリブーの不猟のためにイヌイットが集団で餓死するという事件がおき、この事件に関してカナダ連邦政府は国際的な非難を浴びた (スチュアート 1995)。
- (5) 現在では、ワシントン条約によってアイボリー製品の輸出が禁止されて国際的な市場が期待できなくなったことと彫刻の過剰生産によって、彫刻は売れなくなってきており、現金収入源としての彫刻にはかなりの陰りがみられる。
- (6) ネットリック・イヌイットは、「伝統時代」には、主にシンプソン (Simpson) 半島、ブーシア (Boothia) 半島、アデレード (Adelaid) 半島とその南に広がる後背地、さらにキング・ウィリアム (King William) 島に分布して季節移動生活を営んでいたが、1950年代から1960年代にかけて、ペリーベイ (Pelly Bay)、スペンス・ベイ (Spence Bay)、ジョー・ヘイブン (Gjoa Haven) の三つの村に集結して定住するようになった (スチュアート 1992:p.75)。
- (7) 現在のカナダ・イヌイットの生活はかなりの部分で英仏系カナダ人の生活と同質化しており、またカトリックなどのキリスト教徒でもあり、クリスマスを祝い、プレゼントを交換する習慣をもつようになっている。このプレゼントは普通は工業製品であり、現金でなければ入手することができないため、クリスマスの直前には現金収入が必要になる。

引用文献

Blodgett, J.

- 1979 *The Coming and going of shaman: Eskimo shamanism and Art*, The Winnipeg Art gallery: Winnipeg.
- 1988 The historic period in Canadian Eskimo art, *Inuit Art: an anthology*, Watson and Dwyer Publishing: Winnipeg.

Carpenter, E.

- 1973 *Eskimo Realities*, Holt, Rinehart and Winston: New York.

Carpenter, E., F.Varley and R.Flaherty

- 1959 *Eskimo*, University of Toronto Press: Toronto.

Collins, H.

- 1962 Eskimo Cultures, *Encyclopedia of World Art* vol.5, McGraw-Hill.

Collins, H.ed.

- 1973 *Far North*, National Gallery of Art: Washington D.C..

Dorais, L-J.

- 1990a *Inuit Uqausiqatigiit: Inuit Languages and Dialects*, Arctic College: Iqaluit
- 1990b The Canadian Inuit and their languages, *Arctic Languages: An Awakening*, Collis, D.R.F.ed., Unesco: Paris.

Goetz, H.

- 1984 Three Decades of Inuit Art, *Arctic Vision: Art of the Canadian Inuit*, Lipton, B.ed., Canadian Arctic Producers: Ottawa.
- 1993 Inuit Art: A history of government involvement, *In the shadow of the sun: Perspectives on contemporary native art*, The Canadian Museum of Civilization: Hull.

Graburn, N.H.H.

- 1967 The Eskimo and 'Airport Art', *Transaction* vol.4.
- 1969a *Eskimo without Igloos*, Little, Brown: Boston.
- 1969b Art and Acculturative Processes, *International Social Science Journal (UNESCO)* vol.21-3.
- 1976 Eskimo Art: The eastern Canadian Arctic, *Ethnic and Tourist Arts: Cultural Expressions from the Forth World*, Graburn N.ed., University of California Press: Berkeley.

- 1984 The Evolution of Tourist Arts, *Annals of Tourism Research* vol.11-3
 - 1987 Inuit Art and the Expression of Eskimo Identity, *The American Review of Canadian Studies* vol.17-1.
 - 1993 The Fourth World and Fourth World Art, *In the Shadow of the Sun: Perspectives on Contemporary Native Art*, The Canadian Museum of Civilization: Hull.
- Harp, E.
- 1969/70 Late Dorset Eskimo Art from Newfoundland, *Folk* vol.11-12. Harp and Hughes
 - 1968 Five Prehistoric Burials from Port aux Choix Newfoundland, *Polar Notes* 8. Helmer, J.
 - 1980 Early Dorset in the High Arctic: A Report from Karluk Island, N.W.T., *Arctic* vol.33-3.
- Houston, J.A.
- 1951 Eskimo Sculptors, *The Beaver* vol.34-9.
 - 1971 To find life in the stone, *Sculpture/Inuit: Masterworks of the Canadian Arctic*: Toronto.
- 岸上 伸啓
- 1990 「カナダ国北西準州ペリーベイ村におけるネツリック・イヌイトの拡大家族について」『北海道教育大学紀要』Vol.42-1.
- Maquet, J.
- 1971 *Introduction to Aesthetic Anthropology*, Addison-Wesley: Mass.
- Martijin, C.
- 1964 Canadian Eskimo Carving in Historical Perspective, *Anthropos* vol.59.
 - 1967 A Retrospective Glance at Canadian Eskimo Carving, *The Beaver*. Maxwell, M.
 - 1984 Pre-Dorset and Dorset Prehistory of Canada, *Arctic: Handbook of North American Indians* vol.5, Damas, D. ed., Smithsonian Institution: Washington D.C..
- McGhee, R.
- 1976 Differential Artistic Productivity in the Eskimo Cultural Tradition, *Cultural Anthropology* vol.17-2.
 - 1977 Ivory for the Sea Woman: the Symbolic Attributes of a Prehistoric Technology, *Canadian Journal of Archaeology* vol.1.
 - 1987 Prehistoric Arctic Peoples and Their Art, *The American Review of Canadian Studies* vol.17-1.
 - 1988 The Prehistory and Prehistoric Art of the Canadian Inuit, *Inuit Art: An Anthology*, Watson and Dwyer Publishing: Winnipeg.
- Meldgaard, J.
- 1960 *Eskimo Sculpture*, Methuen: London and New York. Mitchell, M.
 - 1993 *Social, Economic, and Political Transformation among Canadian Inuit from 1950 to 1988, In the Shadow of the Sun: Perspective on Contemporary Native Art*, Canadian Museum of Civilization: Hull.
- Routledge, M. and I. Hessel
- 1993 Contemporary Inuit Sculpture: An Approach to the Medium, the Artists, and their work, *In the Shadow of the Sun: Perspective on Contemporary Native Art*, Canadian Museum of Civilization: Hull.
- Rundstorm, R.
- 1990 A Cultural Interpretation of Inuit Map Accuracy, *Geographical Review* vol.80-2.
- Taylor, W. and G. Swinton
- 1967 The Silent Echoes: Pre-historic Canadian Eskimo Art, *The Beaver* (Autumn).

斎藤 玲子

- 1993 「北方諸民族における現代の民族芸術研究への課題：イヌイト・アートの商品化の歴史を中心に」『北海道立北方民族博物館研究紀要』vol.2.

スチュアート ヘンリ

- 1985 「先史エスキモー文化の装飾について：極北4000年間の「美術史」序説」『古代』vol.80.
- 1992 「定住と生業：ネツリック・イヌイトの伝統的生業活動と食生活にみる継承と変化」『第6回北方民族文化シンポジウム報告』北海道立北方民族博物館
- 1993 「イヌイトか、エスキモーか：民族呼称の問題」『民族学研究』vol.58-1
- 1995 「現代のネツリック・イヌイト社会における生業活動：生存から文化的サバイバルへ」『第9回北方民族文化シンポジウム報告』北海道立北方民族博物館（印刷中）

スチュアート ヘンリ，山浦 清

- 1989 「カナダ北西準州ベリーベイにおける考古学・民族学概報」早稲田大学考古学研究室

Swinton, G.

- 1967 Prehistoric Dorset Art: the Magico-Religious Basis, *The Beaver* (autumn).
- 1968 Eskimo Art: A Living Art Form, *Eskimo of the Canadian Arctic*, Valentine, V. and F. Vallee eds., McClelland and Stewart Ltd.: Toronto.
- 1972 *Eskimo Sculpture*, McClelland and Stewart: Toronto.
- 1978 Touch and the real: contemporary Inuit aesthetics: theory, usage and relevance, *Art in Society: Studies in style, culture and aesthetics*, Greenhalgh, M. and V. Megaw eds., Duckworth: London.
- 1987 Inullarit: Truly Eskimo: No Fuel for the Fire, *The American Review of Canadian Studies* vol.17-1.

Woodbury, A.C.

- 1984 Eskimo and Aluet Languages, *Handbook of the North American Indians: Arctic* vol.5, Smithsonian Institution: Washington D.C.